

II 実践

<実践例> 第1学年 平成30年1月

(渋谷 知宏)

1. 題材名 篠笛の魅力に迫ろう (3時間)

主教材 : 「中学生の器楽」篠笛 P42～43 / 教育芸術社

関連教材 : 「豆腐売りのラッパ」 / 不明 「さくらさくら」 / 日本古謡

「海の声」 / CMソング 「花笠音頭」 / 山形県民謡

2. 題材の概要

日本の伝統的な楽器を扱うということは、同時に日本の伝統的な音楽のよさを味わうということである。歌うだけでは感じ取れなかった美しさや面白さなどの魅力を捉えさせるのに効果があると考えている。歌唱で高められなかった興味・関心も、そこに手遊びなどの身体的な動作や実際に楽器を演奏することで新たな気付きや発見があるからである。またこの題材は、日本音階と楽器の特徴、楽器の音色と旋律の雰囲気、伝統的な音楽の歴史と生活や社会での役割など、幅広く関連付けられる題材である。

学習指導要領では、3学年を通して一種類以上の和楽器を取り扱うこととしている。現在では、箏に取り組んでいる学校が多いのではないと思われる。調弦をしっかりと行うことができれば、爪で弦を弾くだけで音が鳴り、順番に弦を弾けば容易に楽曲を演奏することができることが取り入れられている要因なのであろう。今回扱う篠笛は管楽器であるため、楽器を口に当て、息を吹き込まなければ音が出ない。また、息を出す角度や息のスピードなどをコントロールしながら音が出るポイントをつかまなければならない。その点がリコーダーや他の和楽器と比較すると難しい点である。しかしながら、民謡を耳にした時に横笛の音色を感じ取ったり、地域によってはお祭りで横笛を担当し郷土の芸能と関わったりと大変身近な楽器でもある。多少音を出すことが困難であっても、演奏方法を工夫するなどして日本の旋律に触れることで、我が国や郷土の音楽に親しみを持つことが期待できる。

日本の伝統的な音楽や楽器に触れるのは、中学校においてこの題材が初めてであるが、幼いころにわらべ歌や手遊び歌などで日本の音楽を経験してきた生徒は多くいた。「自分の知っている伝統的な音楽はないか」、「郷土の音楽はないか」という問いに対して、「花笠音頭」と答えた生徒が多く、それ以外の曲については出てこなかった。また、「日本の伝統的な楽器は」という問いについては、和太鼓や箏、尺八などの楽器名を概ね挙げる事ができた。しかし、伝統的な音楽に興味があるか、好きかという問いには、多くの生徒が関心をよせていなかった。日本の文化に関わる習い事をしている生徒も少なく、普段から地域の行事や祭りに参加している生徒も少ないからだと考えられる。本題材で篠笛を扱い、実際に音を出してみることで、日本の旋律のよさに気付き、自己の生活や社会に大きな役割を果たしている音楽文化への理解を深める機会となると考えた。

3. 指導にあたって

(1) 本題材で目指す生徒像

篠笛の楽器の音色のよさを感じ取りながら、楽曲演奏を楽しんでいる生徒。

(2) 重視した資質・能力と、発揮させるための手立て

本題材で重視した資質・能力と、それを発揮させるための手立ては以下の通りである。

「篠笛の魅力に迫る」ことを、題材を貫く課題として設定し、楽器の特徴を捉え、基礎的な奏法を身に付けて器楽表現を工夫すること（第1学年「A表現・器楽」イ）に重点を置いて進めた。篠笛の基礎的な奏法を身に付けるためには、生徒自身が音を出すことができたという体験が必要になる。音を出すのにコツが必要な楽器であるため、音が出れば指使いを確認し次の段階に進むことができる。響きのあるクリアな音が出なくても、かすれた音にも味わいがあることを伝え、自信を付けさせた。また、教科書に記載されている曲だけではなく、生徒が普段から聞いていると思われるあろう旋律や、郷土の旋律も提示し、生徒が少しずつ自分の技術に合わせてレベルアップしていくことができるようにした。そうすることで旋律を比較し、篠笛の指使いの特徴を捉えたり、昔から受け継がれている日本の旋律が、現在の音楽にも使われ発展してきていることにも気付いたりすることができるようにした。さらに、このような和楽器は、指導する際、先人たちは口唱歌を用いて伝承してきた。この口唱歌を用いて楽器を練習することで、和楽器の特徴のみならず、日本の楽譜の読み方や独自性をも捉えることができる。これらを通して、楽器の特性を生かして器楽表現を工夫していくことができる力を付けさせたいと考えた。そして、この題材を通じて得たものは、特に全教科共通で重視して育む資質・能力「知識や技能、経験の生かし所を見出す力」を伸ばすことにつながると考えた。生徒たちが社会に出た時、諸外国の人々に我が国の伝統的な音楽のよさを伝えることができるようになるとともに、伝統的な音楽が生活や社会で大きな役割を果たしていることを理解しながら、幅広い音楽文化と関わり、自身の生活をより豊かに送ることができる力へとつながるよう期待した。



4. 授業の実際

学習計画（3時間計画）

学習活動（時数）	目指す生徒の姿（観点）
1. 篠笛の基本的な奏法を身につける。 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・篠笛に関心を持ち、楽器の特徴や演奏するために必要な技能を調べたり、音を出してみたりしている。（関・意・態） ・篠笛の基礎的な奏法を身に付けて音を出している。（技能）
2. 旋律のよさを生かして、篠笛で音楽表現を工夫する。 (1) 本時は1 / 1	<ul style="list-style-type: none"> ★旋律の曲想と音楽を形づくっている要素を結び付け、どのように演奏するか思いや意図を持つことができる。（創意工夫）
3. 篠笛のよさや生活や社会で果たしている役割を理解する。 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・篠笛の演奏を鑑賞し、篠笛の楽器の音色のよさや、篠笛が生活や社会で果たしている役割について自分の考えを学習プリントにまとめている。（鑑賞）

本時の流れ

1. 本時の目標

旋律のよさを生かして、篠笛でどのように音楽表現を工夫するかについて思いや意図を持つことができる。

2. 過程

学習活動【学習形態】	目指す生徒の姿	教師の手立て
課題 篠笛で旋律を演奏してみよう。		
1. 前時の復習をする。 【一斉】	・篠笛の楽器の特徴と基礎的な奏法について振り返っている。	・篠笛の基礎的な奏法を振り返らせるために、口の当て方、息の使い方、構え方について再確認する。
2. 自分が選択した旋律の特徴を捉え、どのように篠笛で演奏するか、思いや意図をもつ。【グループ】	・自分が選択した旋律の雰囲気を感じ取り、音楽の要素と関連させながら、どのように演奏するかについて学習プリントに記入している。	★思いや意図を持たせるために、歌詞や口唱歌で歌うことを取り入れる。また、学習プリントに「どんな旋律か」「そう感じたのはなぜか」「どのように演奏したいか」の3点を記入しながら練習させる。
<p><重点を置いた音楽科の資質・能力を発揮している姿> ★自分が選択した旋律のよさや面白さを感じ取りながら、どのように演奏するか思いや意図を持ち、篠笛で旋律を演奏している。</p>		
3. 活動を振り返る。 【一斉】	・自分がまとめた思いや意図を生かして、「豆腐屋のラップ」「たこたこあがれ」を演奏している。	・演奏に失敗し、意欲をなくしてしまわないようにするために、失敗を恐れず挑戦することに価値があることを説明するとともに、生徒が考えた思いや意図を発表させ認めていく。

3. 評価とその方法

篠笛で旋律をどのように表現を工夫するかについて、思いや意図を持つことができているかを、活動2の様子と、学習プリントに記載された内容から評価する。

学習プリントの生徒の記載内容より

	旋律を吹いてどう感じたか	そう感じ取ったのはなぜか	どのように演奏するか
Aさん(さくらさくら)	「和」を感じた。	メロディーと音の深さ、指打ちという奏法からそう思った。	指打ちで音が小さくなるので、一つひとつの音をなめらかに演奏したい。
Bさん(さくらさくら)	優しくきれいな感じ。 春が来た感じ	指打ちがあることで音のつながり方が独特だと思った。	音のつながりを意識してやさしく演奏したい。
Cさん(花笠音頭)	ワクワクするような感じ。	付点のリズムがくり返して行くから。	付点のリズムが難しいが、踊りたくなるように、音をはっきりさせて演奏したい。
Dさん(豆腐屋のラップ)	誰かに聞いてほしい感じ	音が高かったから。	力強く演奏したい
Fさん(チャルメラ)	指の移動が少なく簡単	指の位置があまり変わらなかったから。	屋台をイメージして演奏したい。

学習プリント

2. 演奏してみよう！

(7) 次の旋律の中から選び、演奏してみよう

- ① 豆腐屋のラップ(と〜ふ〜)
- ② さくらさくら(の曲だけ)
- ③ たこたこあがれ(教科書)
- ④ ほたるこい(教科書)
- ⑤ 花笠音頭(チャン チャーラ チャン チャララーラ チャンチャランチャラン)のところが
- ⑥ 海の声(seiの曲)
- ⑦ その他(自分で挑戦したい旋律を吹いてみる)

最低1曲目は、この欄が完成させられるように頑張ろう

(8) 曲を選んだら、次の手順で演奏してみよう

①選んだ曲は			
②旋律を吹いてみて、どんな感じがしたか?			
③そう感じ取ったのはなぜか?			
④どんなふうに演奏したいか?			
⑤近くの人に発表しよう(聞いてもらった人コメントを記入してもら)			

※ 1曲目が完成したら、2曲目、3曲目に挑戦してみよう

5. 授業を終えて—考察—

実践を通しての成果(○)と課題(▲)は以下の通りである。

○1時間目に身に付けた篠笛の基礎的な奏法を生かして、課題として提示した様々な旋律を演奏しようと、生徒たちは意欲的に活動を行っていた。その要因となったと考えられることは、多数の中から生徒の技能にあったものを選択できたこと、生徒にとって馴染みのある旋律や興味を持ちそうな旋律を提示したことにあると思われる。

○既習していたリコーダーの音色や奏法と比較しながら篠笛の特徴を捉え、その違いが伝統的な雰囲気をもたらしているということに面白さを感じ取っている生徒が多かった。特に「指打ち」というタンギングをしないで演奏する方法に、生徒たちは「音のつながりがきれいだ」「リズムミカルになる」などと感じていた。篠笛を題材にして取り組んだことで、日本の音や音楽に愛着を持たせることができたと感じている。

▲生徒が捉えた日本的な雰囲気になる要素について共有する場面を設けたり、仲間に発表する時間を増やしたりする必要があった。生徒は旋律を演奏できるようになりたいと必死であった。そのため個人で捉えていたことを深く味わったり篠笛の特徴が日本的な要素に結び付いていなかったりしている生徒がいた。時間配分や学習計画の時数を検討したい。

▲知覚・感受したことをもとにどのように演奏するか思いを持たせるために、「どんな感じがしたか」「どんなふうに演奏したいか」という問いをしたが、旋律の雰囲気やイメージを答えている生徒と、楽器の奏法について答えている生徒があり、視点が様々で評価が難しくなってしまった。問いを吟味したり、学習活動の途中で、音楽形づくっている要素のどの部分に着目して考えるのか整理する必要があった。

